

今日のみことば

□ 2月26日(日) ロマ 7章

律法は罪に対する悔い改めを生む働きを持っているが、それは聖化ではない。信者の良心を照らすだけで、罪の支配力を破壊することは出来なし。

□ 2月27日(月) ロマ 8章

ここにはキリスト者の救いの確かさが、神の側のみ業に結びつけられて語られている。その愛の深さは、御子をも惜しまれなかったという事実によって確認されている。

□ 2月28日(火) ロマ 9章

神の御心と人間の考えとは違う。人間の考えによって、神の考えを押しはかろうとするときに、いつも間違いが起こる。私たちは被造物である。

□ 3月1日(水) ロマ 10章

神は救い、いのちを人々に与えるに当たって、一つの条件を求められる。復活のキリストを、主と公に告白することです。イスラエルは聞き、理解したが、信じようとはしなかった。

□ 3月2日(木) ロマ 11章

神の救いを選びは恵みによるのである。神が恵みによって選んでおられた者が救われた。イスラエルばかりでなく、異邦人の中にも選ばれた人はいた。

□ 3月3日(金) ロマ 12章

救う力である福音の教理が分かった上は、実践である。救われた者が愛の実践をなし得るためには、献身がなされなければならない。

□ 3月4日(土) ロマ 13章

ここには社会倫理が述べられている。しかし倫理が神信仰と結びつけられ、それに根ざしていることが重要である。神が秩序の神であり、神が秩序のすべてを保っておられる。

ろば No. 1804
2017年 2月26日
日本バプテスト立川キリスト教会
牧師 大川 博之

エペソ6:18

どのような時にも、“霊”に助けられて祈り、願い求め、すべての聖なる者たちのために、絶えず目を覚まして根気よく祈り続けなさい。

パウロは「わたしが適切な言葉を用いて話し、福音の神秘を大胆に話すことができるように、わたしのために祈って下さい」と言います。これこそが私たちが「天にいる悪の諸霊を相手に」戦いを勝利に導く最後の秘策だと私は心得ています。私たちはしっかりと諸悪との戦いのために「神の武具」を身につけて備えをしなければなりません。それに加わえて、天の軍勢の援軍の助けを願うことはもっと必要ではありませんか。パウロはことあるごとに、友に祈りの支援を求め願って来ました。それはパウロの働きの大きな力であったことを私たちは知っています。この手紙を始めとして、獄中書簡の中で苦闘しながらも、いつも感謝があふれるのは「あなたがたの

祈りと、イエス。キリストの霊の助けとによって、このことがわたしの救いになると知っているからです」(ピリピ1:19)と言いました。祈られていることは何にも勝る援軍なのです。

私はいつも聖アウグスティヌスの母の祈りを、思い起こさせていただいています。この中世の偉大な聖徒の青年時代は、まさに放蕩息子でした。真の神に逆らい続けている、不肖の息子のために母モニカは、日夜涙の祈りを続けました。アウグスティヌスが苦悩に満ちた心身を、ミラノ寺院で休めていたときに彼は「取りて読め」との声を聞きました。彼はかたわらの聖書を取り、ロマ13章11節以下のみ言葉を読みました。30余

年の長い母の祈りは、こうして答えられました。やがて彼は西方教会の最大の教父と言われるまでになりました。

パウロはテモテに、祈りについて「まず第一に勧めます。願いと祈りと執り成しと感謝を、すべての人々のためにささげなさい。わたしたちが常に信心と品位を保ち、平穏で落ち着いた生活をするためです。これは、わたしたちの救い主である神の御前に良いことであり、喜ばれることです」(一テモ2:1-3)と教えました。またパウロは「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい。そうすれば、あらゆる人知を超える神の平和が、あなたがたの心と考えとをキリスト・イエスによって守るでしょう。」(ヒルビ4:6-7)と言います。

私は世の諸悪との戦いにおいて、最も大切なもの、それは主キリスト・イエスが、どのようなときにも共にいて下さることを信じる、信仰の確かさであろうと示されるのでした。私たちは自分の身を守るべく武具をしっかりと着けなければなりません。それとともに、全世界に攻撃を仕掛けてくる悪魔であれば、私たちは全知全能なる神の指示と支援を仰がねばならないのは当然ことです。しかも祈り続けなければなりません。イエスは聴かれる祈りの事例として、執拗に求め続けたやもめの話を(ルカ18:1-8)されました。しかも口先だけの自分勝手な祈りは通用しません。神の御霊にあつて、御霊の思いをもって、御霊も言葉を持って祈るなら、必ずその結果を私たちは受け取ることが出来ます。

————— 《 聖書の学び・祈祷会 》 —————

ヨハネ5:1-16

イエスの思い

私たちは、イエスが私たちの病とどのように向きあつてきて下さったかを考えます。

マルコは四人の友人に連れてこられた中風の人の癒やしを、ヨハネは38年間も病気で悩んで人の癒やしを、イエスが安息日に行われたことでの論争を取り上げたが、彼らは誰かに助けられてイエスのもとに来ました。しかしこのベテスダの病人はイエスに出会うまでは、誰にも助けてもらえませんでした。どちらの場合でも、病人の苦しみは罪の結果でした。

イエスはベテスダの病人に「良くなりたいか」と言われ、「起きて、床を上げ、歩きなさい」と言われました。ここでは病気に悩んでいた人の、付随的に言われた(14)のみでした。そしてここでも安息日問題が浮上したようですが、イエスはきっぱりと「わたしの父は今もなお働いておられる。だからわたしも働く」と言われる。しっかりイエスの權威を見ることです。



Read God's Word.